

和歌の特徴の一つは、一つの言葉にいくつもの意味を重ねて短い文節で広い世界観を示すことにある。特に、対となる言葉が複数登場すると、前述の言葉群と後述の言葉群が互いに関連しあって意味が重層的に現れる。「おふでさき」の第三号八十一首から九十一首には次のような対比が見られる。まず、①「神」と「上」(上に立つ人々)、次に②「にほん」(教えが先に説かれる所)と「から」(教えが次に行き渡る所)、そして③「根」と「枝」の対比である。意味のグループとしては「神—にほん—根」が対応しており、その反対に「上—から—枝」が対応している。

このような対比構造を踏まえて、これら数首の大意は以下のように示される。「これからは神の心と上に立つ人々の心を対比させる」(三号81)、「この話をちょっとしたことと思うな、神が今の状況を見かねた上にする大切な話である」(三号82)、「これからは神の力と上に立つ人々の力の力比べをすと思え」(三号83)、「どれほど剛力ある者でもいるなら出してみよ、神の方には倍の力がある」(三号84)、「真の神がおもてに出ているのであるから、どのような手段をも講じると思え」(三号85)。

このように上に立つ人々に対する神の力について説いたあと、「にほん」と「から」を対比させて、「今までは神の教えを知らない者たち(『から』)が、その教えを奉じる者たち(『にほん』)に対して勝手な振る舞いをしてきたが、この神の残念をどうしたらいいだろうか」(三号86)、「これからは『にほん』が、『から』を従わせるようにするから皆承知してもらいたい」(三号87)と、「から=神の教えを知らない者」(特に上に立つ人々)の身勝手な様子を残念に思う気持ちを表している。

そして、続けて「根」と「枝」を比べて、「同じ木の根と枝ということであれば、枝は折れてくる一方、根は榮えてくる」(三号88)、「これまでは『から』が偉いと言ってきたが、これから先は折れるばかりである」(三号89)、『『にほん』を見ても、小さいように思っていたが、根が現れてきたならば恐れ入ったものとなる」(三号90)、「このような力は人間がないうることとは思えない、神の力である、これはかなわないものだと言うようになるだろう」(三号91)と、「から—枝」と「にほん—根」と対応づけて、さらに「根—神の力」と関連づけている。

さて、ここで注目したいことは「根」という表現である。『注釈』には、「教祖様が断食をなさった時に、そんなに断食なされても大丈夫でしょうか。と、御心配申し上げた人に、『根は心や。心さえ親神様に通じていたら決して枯れないのや』という意味の事をお諭し下された事がある」と記されている。ここでは「根」とは心であり、このお諭しによれば、その人の心根が親神の思いに沿っていたら、断食という身体に負荷の掛かるような行いでも心身が「枯れない」とされる。「おふでさき」の他の箇所でも「根」という言葉は「病の根」や「謀反の根」と表現されて、このお諭しと同様に、病気や争いなど物事の根本原因としての心を示している。

また、ここでは根が「現れる」と表現されている。「現れる」という表現は「表に出る」と同様に、「おふでさき」ではその主体が親神であることが多い。つまり、「根」とは根源神とし

ての親神(神の力)であり、人間が「小さいように思っていた」その教えが実は人間と世界の根源性を顕しており、そのことを実感した人間は「恐れ入る」とされる。このような根源性は「おふでさき」では再三「もと(元)」という言葉で表現されており、別の号では、「元というものは小さいようで根が立派である、どのような事も元を知ることだ」(五号43)とも詠われている。

さらに『注釈』は、「折れる」という言葉について「人間思案の我を折って、親神様の真意に懐いて来る」と説明している。「折れる」ということが「我を折る」ことであるなら、「同じ木の根と枝ということであれば、枝は折れてくる一方、根は榮えてくる」(三号88)とは、「人の心を根と枝に喩えれば、枝が折れるように我が折れてくる一方で、元々の心根が活発に現れてくる」と意識できる。続く歌も同様に「今までは教えを聞いていない者(から)を偉いと言ってきたが、これからその我も折れるばかりである」(三号89)、「教えを聞いている者たちを見てみよ、頼りないちっぽけな者たちに思われたが、その心根が現れてきたなら畏怖の念が生じるほどになる」(三号90)とそれぞれ意識でき、自らの我を折り、それに応じて、心根(根源性)が顕れてくると解することができる。

このような心のあり方は、「栗の節句」(『逸話篇』77)という話にも読み取れる。教祖は「栗はイガの剛いものである。そのイガをとれば、中に皮があり、又、渋がある。その皮なり渋をとれば、まことに味のよい実が出て来る。人間も、理を聞いて、イガや渋をとったら、心にうまい味わいを持つようになるのや」と述べられて、我が折れて心根が現れてくる様子を身近なものに喩えて明瞭に論されている。

以上、「根」あるいは「根が現れる」や「折れる」という表現をめぐって該当首を考察した。「根」という言葉は「元」と同様に根源神としての親神や人間と世界の根源性を示しているが、それは同時に人の心根も意味し、人の心がそのような根源性に深く根ざしていることを示している。

根というメタファーで直感できることは、根は見えないもので、見えている箇所は枝であり葉や実や花である。また、栗というメタファーでいえば、見えているものはイガで、その中に味わい深い実がある。「おふでさき」は、そのようなトゲのついたものに隠れて見えない根源性が現れてくることを詠っているが、それは教えを先に聞いている者だけでなく、いまだ教えを聞いていない者や上に立つ人々にも当てはまる。つまり、人間誰しも親神の根源性に触れるような心根を持っていると考えられる。したがって「今までは『から』を偉いと言ってきたが、これからその我も折れるばかりである」(三号89)とは、「いまだ教えを聞いていない者にもその教えを聞かせて、元々の根源性に触れた味わい深い心が現れてくるように、これからはその我が折れてくるばかりである」と解することができる。

そして、そのように親神の話を聞いて心の枝が折れ、根源性を感じられる者は「このような力は人間がないうることとは思えない、神の力である、これはかなわないものだ」(三号91)と思うのであろう。